

書 評

『車両損害の最新判例とその読み方』

小賀野晶一・亀井隆太 共著

小賀野晶一教授(中央大学法学部)と亀井隆太准教授(横浜国立大学商学部)の共著になる本書は、交通事故紛争処理実務を担っている実務家向けに、車両損害の最新判例の動向を明らかにするため、平成27年〜30年の裁判例234件(一部に平成31年の裁判例も含



まれる)を取り上げ、整理し、その特徴や動向を分かりやすく解説したものである。本書のタイトルには「車両損害」とあるが、車両自体の損害(車両には自動二輪車・原動機付自転車・自転車を含む)の他にも、代車料・休車損・レッカー代

実務家向けに最新判例の特徴・動向解説

故法・賠償医学については造詣が深く、交通事故法の論文や著書も多く上梓されている。亀井准教授は千葉大学大学院での小賀野教授の教え子と伺っている。小賀野教授は、1988年に同じ保険毎日新聞社から故・野村好弘東京都立大名誉教授との共著で『車両損害

の判例と考え方』を出版されているが、本書は新しく書き下ろされたその完全リニューアル版とみることもできよう。「はしがき」で指摘さ

れているとおり、車両損害の判例はほぼ定着しているが、実務家にとってはその具体的な運用(具体的事案における判断)が重要関心事である。本書はその期待に応えるも

可能な損害―評価損―「第3章 修理不能な損害」 「第4章 買替差額」に、IIを「第1章 代車料―肯定」 「第2章 代車料―否定」 「第3章 休車損」に、IIIを「第1章 車両の引き揚げ費、レッカー代」 「第2章 車両保管料」 「第3章 登録手続関係費」 「第4章 積荷損害」 「第5章 携帯品・搭載

例えば、Iの第1章は、「1 経済的全損か否か」 「2 損傷の範囲」 「3 修理方法」 「4 修理作業の範囲」 「5 修理工賃」 「6 修理未了」 「7 リース車両」という具合に細分化して裁判例が整理されている。目次も同様に細分化され、さらに目次には裁判例まで表示されている。

巻末には判例索引に代わるものとして「裁判例一覧表」が掲載されており、①車両の種類②車名(国産・外国車別)③初度登録④登録からの経過年⑤走行距離⑥裁判所の判断―が記載されているので、こちらから必要な裁判例を見つけ出すこともできる。

とめられており、目次も座右に置いて参照するには手ごろな分量となっている。本書は、前述のとおり、交通事故紛争処理実務を担っている実務家の方々にぜひ座右に備えていただきたい一冊である。(A5判/296頁、保険毎日新聞社刊、2020年6月発行、本体価格3200円+税)

評者 北河隆之(弁護士・琉球大学名誉教授)